資料１

第１回・第２回検討委員会の意見整理（下線が２回目の意見）

１　議論の進め方

①まず先に何をする場なのか考える

・まずは誰が何をするかを考えた上で、最終的に必要な施設があるとすれば何なのかという順番で議論を進めるべき

②過去の事例に学ぶ

・敬虔な雰囲気だけでは人は来ない

・戦災復興の面的なことを伝える施設が多く、個人のストーリーを扱う施設が少ない

・写真のなかの面影は、全然知らない人にも訴える力がある。アウシュビッツ記念館のように遺影が並んでいる施設もあるが、今回のような津波や地震など自然が原因となった場合は、また違うアプローチがあるような気がする

③他の被災地に聞く

・他の被災地から見て、仙台の拠点に何を求めるのか聞いてみるとよいのでは

④行政的な施設にしないという心構えが必要

・予算、人員配置など、行政の仕組みの限界を超える取組みであり、行政施設にしないという心構えが必要

⑤早い段階で将来のスタッフを巻き込んだ議論を

・拠点づくりにあたっては、通常のやり方を超える覚悟を持ち、早い段階で将来のスタッフを巻き込んだ議論ができればいい

⑥拠点の検討と並行してすべきこと

・震災の振り返りや、記録の発表・展示、記録の支援など、震災から 10 年や拠点づくりにつながることを意識的にやっていくべき

⑦行政・メディア・市民・企業がそれぞれ「自分がやった」と思えるようなプロセスを経ること

・仙台は市民協働、市民力のまちという系譜がある。脱スパイクタイヤ運動のように、行政・メディア・市民・企業のそれぞれが「自分がやった」と思えるようなプロセスを経ることが出来れば、仙台市独自の力を持ったものが出来るのではないか

２　東日本大震災の経験とは

①未曾有の経験

・これだけ多くの方が犠牲になったという犠牲の重さ、暮らしや幸せが奪われたということ

・８年が経っても 2533 名の方々がいまだに見つかっていない

②想像を超える出来事・全てを理解し得ない

・今回の震災は想像を超える出来事であり、理解できないことがある怖さが、この震災の本質。分かりやすく括ることで安心するかもしれないが、それは誤解に過ぎない

・東日本大震災は人知を超えた巨大な出来事であり、全ては分かり得ない。その「分からなさ」をどのように引き受け、伝えて行けるかがすごく重要

③原発事故

・原発事故の取扱い（当拠点での位置付け・比重）を考えたい

３　仙台の特質と中心部の場所性から中心部震災メモリアル拠点のあり方を考える

問　題　提　起		
[１]仙台の特質 ・仙台ならではの機能も追及すべき		
背　景	**コンセプト・手段**	**実現したいシーン**
①東北の拠点 ・東北の中での中心的な役割。長いスパンでの取組が必要。アーカイブ１つとっても、その体力をもってやれるのが仙台であるという心構え ・東北唯一の政令市として、被災３県を視野に展開を	**①各施設・団体との連携** ・仙台にまず来て、次の場所に行けるようにすることが大事な役割 ・施設同士をつなげると同時に、地域につなげる、地元・東北の文化も大事に ・マルチノード（様々な場所の接点）として様々な施設とつながり、訪れる人の出発点として、様々な場所のことを伝えられる施設 ・既に被災地をつなぐネットワークを大切にして連携ができると良いのではないか **②アーカイブの展開・連携** ・他被災地の現物やアーカイブについては、現地性を尊重したい。奪うのではなく、被災地連携の一つとして、アーカイブ研究やアーカイブの支援ができると良い ・震災の記憶を目に見える記録として残していく、その大変な作業を東北の被災地のなかで唯一組織的・継続的にできるかもしれないのが、仙台。少なくとも挑戦する義務はある	**①訪れた人が目的や時間に応じて周る** ・訪れた人が目的や時間に応じて、様々な施設を周る
②市民力のまち ・市民協働を進めてきた仙台市として市民がアクションを起こす場所を作る ・仙台は市民協働、市民力のまちという系譜がある。脱スパイクタイヤ運動のように、行政・メディア・市民・企業のそれぞれが「自分がやった」と思えるようなプロセスを経ることが出来れば、仙台市独自の力を持ったものが出来るのではないか（再掲）		
③繰り返してきた災害の歴史 ・仙台には約 30 年に１度の頻度で地震が繰り返してきたという固有性がある ・津波被害に焦点を当てすぎた伝承だと、利府長町断層による直下型地震が起きた時にカバーしきれない。将来起こり得る災害を見通して考えるべきだが、どこまでカバーすべきか ・大地震と津波が 400 年単位で襲来していることを鑑みると、次の 400 年に向けて考えるくらいの歴史感覚を念頭に置けると良い。その間に利府長町断層型の地震も起こるかもしれない	**①災害文化の拠点** ・仙台では常識だと思われている独自の災害文化を目に見える形にする拠点（ミュージアムやそれ自体の活動拠点など）	
[２]中心部の場所性 ・沿岸部と市街地を両方持つことが仙台市のユニークなところ。「中心部は現場ではなく、完全に発信に徹する場所」と捉えるか、「中心部も被災の現場であり、沿岸を支える現場でもある」と捉えるか、市中心部の立ち位置には２つの考え方がある		
①震災当時の被災状況を感じられる現場ではないことを念頭において考える ・距離の遠さを理由に沿岸部施設に行かない市民に対して訴求できる可能性があるが、人が来てくれない可能性もある	**①被災そのものを伝えることは沿岸部に** ・東日本大震災は津波被害が主であり、被災そのものを伝えることは現場である沿岸部に重点を置き、中心部は防災や災害対応に特化してもよいのではないか	

②沿岸部のみならず全てが被災の現場 ・どこまでが被災地かという線引きをしがちだが、グラデーションはありつつも沿岸部のみならず、丘陵部を含め全てが被災地であるという認識でいるべき		
③他施設との関係性や活用を考える ・求められる機能によっては施設規模・立地に影響する。現在市内で検討中の施設等との関係性も含めて検討すべき ・既存施設を活用する可能性もある。特にメディアテークの役割が大きい		

4　伝承全般から中心部震災メモリアル拠点のあり方を考える

何のために（目的）　／　哲学（かくありたい）

［1］　過去の犠牲を無駄にせず、世代を超えて東日本大震災の経験をつなぐために

・犠牲と混乱を繰り返さないため、犠牲を無駄にしないために

・世代間倫理：世代を超えて災害の経験がバトンタッチされていくような場に

何をしたい（要素）	コンセプト・手段	実現したいシーン
①持続的な動き ・過去を記録するだけではなく現在とのつながりをもたせることが必要 ・災害を乗り越える準備も常に移り変わる。作って終わりではなく、常に更新し続けられるものが求められる（再掲） ・東北の中での中心的な役割。長いスパンでの取組が必要。アーカイブ１つとっても、その体力をもってやれるのが仙台であるという心構え（再掲） ・人の死によって気づかされたことを無駄にせず、今の現実をもっとよく見たり向き合うための場であるべき。そうでなければ、未来に対しても過去に対してもアクティブではない ・何かをつくって一丁あがりにはせず、持続的な活動の場に	**①財源** ・100 年先を見通し安定財源を確保する **②人・組織** ・編集部のようなものを構え、被災の体験を何十年、何百年にわたって聴き続けるようなアクションにつなげられるといい **③災害文化** ・仙台では常識だと思われている独自の災害文化を目に見える形にする拠点（ミュージアムやそれ自体の活動拠点など）（再掲） ・東日本大震災は非常に大きな悲惨さと不安を皆で同時に体験した出来事。災害文化として、災害で受けた悲惨さや不安、その後の状況も含め震災の経験を整理し続け、世界に共有していくような活動の拠点ではないか **④親から子に継承する遊びの場** ・追悼のシンボルとしてモニュメントが必要であり、周りでは子どもが遊びつつ、モニュメントの由来を通じて震災の記憶を親から子に継承するような二重の機能が必要	**①日常的に話題になる機会** ・小さい頃の記憶が長く続く双子のように、語り合うことで記憶が長く続いている状況があると良い **②災害をきっかけに生まれる行事** ・長崎には江戸時代の土砂災害をきっかけに、月に 1 回饅頭を配る「念仏講饅頭配り」という行事がある。100 年以上続き、1980 年代の豪雨の際にその集落では死者が 1 名も出なかった。このように 100 年以上先に結果を残すような行事が作れると良い ・歌のように市民全員が共通で出来ることがある
②多様な経験／あらゆる人に受け入れられる物語 ・被災のレベルが個人であまりにも違う状況がある ・被災の状況に応じ、時間が経ってからでも語れるように、市民に開かれていることが必要 ・多様な物語が交錯する場、物語を紡ぎなおす場に ・追体験できることやリアリティを突き詰めると、被災者の方が入れない施設になりかねない。被災した当事者にも開かれた施設に ・死が人の感情に与える影響は大きく、震災経験者でなくとも、身近な人の死に向き合ったことがある人は、追体験できる可能性がある ・自身は抽象度を上げ、行方不明の方も、動物や微生物で解体され、食物連鎖でつながり、この世で生きているのだという気持ちがある ・いろいろな形で語り整理をつけることで、完全な忘却ではなく、忘却のバランスが大切 ・震災であらゆるものの価値が一度フラットになり、その後の復興に伴う経済活動の中で、自分が誰だかわからなくなり、自分の物語を失うような状況があった ・今回の災害が過去の事象になったとしても、その時代に生きる人と響き合いながら伝えていられると良い ・モニュメントなどは、価値観を変えられた破壊や人の死などから発せられた沢山の物語が背景にあり、人々に愛されるものであるべき	**①伝えるメディアの扱い方** ・実体験を伴わずに被災映像をテレビなどの媒体で見続けることで受ける「まだ見ぬ現実のトラウマ」とどう向き合うかは課題 ・被災された人は、悲惨なものを見たくない反面、自身の物語とのつながりを求めていることもあると思う。時間が経てば、その関係性は変わっていく ・実体験を伴わずに被災映像を見続けることで受ける「まだ見ぬ現実のトラウマ」が今の社会の複雑な問題につながっているような気がするが、自身は震災を目の当たりにして、災害だけではなく、戦争やテロなどに対する想像の範囲が広がった ・現像した写真や手書きの文字に縁遠い世代に共感し得るかは分からないが、写真洗浄が行われた無数の写真、避難所などの張り紙などが呼びかける力はとても大きかった **②多様な経験の総体と個々の経験へのアクセス** ・全ての経験を詳細に見なくとも、それらの総体が感じられ、それから個々の経験にアクセスできることが必要 ・例えば震災の夜の満点の星空のように、多様な経験の総体として純粋な美しさを持ったものが表現できれば、怖くても人は近づけるかもしれない **③その人に応じた記録のキュレーション** ・市民図書館の震災文庫を見たが、記録の量が膨大であり、その人に応じてキュレーションできるような案内人が必要	**①居合わせた人同士が伝え合う** ・被災経験者が自身の経験を新市民に話すなど、その場に居合わせた人同士で経験を伝え合う **②写真を前に語り合う** ・生きている人も死んでいる人も等しく並ぶ写真洗浄の場が、悲惨な現実にあらがうような場であり、確かな場所を求める思いに写真の役割が果たされていた ・見る人・来る人によって記憶が紐解かれ、新たなものになっていく場であってほしい

［2］あらゆる危機を乗り越えるために

・災害を乗り越える準備も常に移り変わる。作って終わりではなく、常に更新し続けられるものが求められる

・これから起こり得る災害、想定外があること、それにどう向き合っていくか考えることも重要な視点

①市民のアクションにつなげる仕組み ・建物だけではなく、人の育成や研究など、市民にアクションを起こしてもらえる仕組みを考えていく場が必要 ・災害の悲惨さを伝えて終わるのではなく、個人の実践につなげる工夫が必要 ・市民協働を進めてきた仙台市として市民がアクションを起こす場所を作る（再掲）		**①市民全員が災害の経験を共通の言葉で伝える** ・災害体験の多様さはあるが、「仙台で起きたこと・伝えたいことは〇〇です」と市民全員がシンプルに言えるようにする
②防災について学ぶ仕組み ・子どもから大人まで防災教育の機能もあった方がよい ・防災を勉強できる施設はあった方がよい	**①中心部は防災や災害対応に特化** ・東日本大震災は津波被害が主であり、被災そのものを伝えることは現場である沿岸部に重点を置き、中心部は防災や災害対応に特化してもよいのではないか（再掲）	
③東日本大震災に留まらず、これから起こり得る災害や想定外があることを考える仕組み ・震災を中心に捉えながらも、震災にとどまらず様々な部門をつなぐハブに ・これから起こり得る災害、想定外があること、それにどう向き合っていくか考えることも重要な視点（再掲） ・特定の災害を覚えておく施設というよりも、災害とともに生きるには何が必要かを発信する ・東日本大震災と仙台だけではなく、国内や海外の災害、過去とこれからとのつながりを考える必要がある。そのことは仙台市での震災の教訓を客観化し再認識する機会ともな	**①モニュメントのような象徴的な存在を通じて想像を超える事があることを伝える** ・理解できないことがある怖さとは、とても抽象的なこと。モニュメントのような象徴的な存在を通じて伝えられるような作りがあっても良い **②震災を目の当たりしたことが想像の範囲が広げる経験でもあった** ・実体験を伴わずに被災映像を見続けることで受ける「まだ見ぬ現実のトラウマ」が今の社会の複雑な問題につながっているような気がするが、自身は震災を目の当たりにして、災害だけではなく、戦争やテロなどに対する想像の範囲が広がった。（再掲）	**①モニュメントを通じて親から子に伝える** ・釜神様のようにモニュメントの存在を子が親に尋ねることで、親から子にその由来を伝える

る ・東日本大震災は人知を超えた巨大な出来事であり、全ては分かり得ない。その「分からなさ」をどのように引き受け、伝えて行けるかがすごく重要 ・人間として生きる力を高められるところ ・災害で心にダメージを受けた方が、気持ちを回復させていくという意味でも、施設なのかプログラムを通じて、生きる力を得られる場所だと良い		
④自然と人間社会のあり方を考える仕組み ・自然と人間の関係・自分の暮らしのあり方を見つめ直すような場 ・津波により引き起こされた、今日の人間社会では成しえない次元の死が、人間社会の意味を考えさせられる契機となった ・3.11 は都市化により感じられなくなった「人間が自然の中にいる」ことを思い出させられた出来事であり、そのことを思い出せるような施設でありたい ・震災当時、津波の後の星空や海について美しいという言葉が異口同音に聞かれたが、それは人の死に直面することで、人間が本能的に持つ自然が、外の自然とシンクロしたから ・打ち勝てないような不安を押し付けられた震災の経験は、震災に限らず、不安に向き合いながらも如何に日常を生きるかという人間の根本的なテーマにつながる ・「（自然現象による）災害には勝てない」から、いざという時には助け合うしかないという構えが必要ではないか ・自然と人間との関係から、災害が災害でない時もある。地球に住んでいるからには自然現象と付き合わなければならず、それを乗り越えることが大事		

［3］都市の未来のために

・震災だけの視点ではなく、時代的役割、街のグランドデザインの中での役割を踏まえた検討が必要

・過去を忘れずにおくことが未来に何をもたらすのか

①災害文化・アイデンティティを創造する仕組み ・災害の経験を仙台市のアイデンティティとして捉え、災害文化を創り広げていくためのセンター	**①災害の経験を整理し続け、世界に共有していく活動の拠点** ・東日本大震災は非常に大きな悲惨さと不安を皆で同時に体験した出来事。災害文化として、災害で受けた悲惨さや不安、その後の状況も含め震災の経験を整理し続け、世界に共有していくような活動の拠点ではないか（再掲） **②今後の対策を考えるためのネットワークの拠点** ・災害時のための企業などとのサポートシステムが平時から組み上げられていれば「共助」につながり、災害対応力が増す。そのような今後に対する対策を考えるためのネットワークの核となる施設であると良い	

［4］伝承一般

①現場・人・物のセット ・被災現場、施設、人がセットであることが効果的 ・現場の持つ力にはかなわない。震災を学ぶには現場とセットであることが大事 ・伝えるためには場所、人、物の３つを揃える必要があり、仙台市全体としてその機能をどう備えるか		・人から人に伝える
②アーカイブ ・記録を集めても活用されていない課題がある ・アーカイブについて、何を記録し、何を残すべきかという改めての議論が必要 ・アーカイブの質と量を検討する必要がある	**①組織やコミュニティ、企業を巻き込む** ・メディアテークで行っているような個人の記録活動の支援を、組織やコミュニティ、企業にまで広げてはどうか **②方法論と極めて長く地道に取り組む覚悟が必要** ・それぞれの記憶を語り合い、それを目に見える形で残していくことはとても大事だが、実際にやるとなると、とても大変な作業。方法論を良く考え、技術とノウハウを持っている人たちを集めてやっていくことが大事 ・アーカイブは１・２年後に成果を判断するのではなく、100 年後・200 年後に向けてやるという覚悟が必要。本当に地道で、気の長い作業 **③アーカイブを通じた被災地の連携** ・他被災地の現物やアーカイブについては、現地性を尊重したい。奪うのではなく、被災地連携の一つとして、アーカイブ研究やアーカイブの支援ができると良い。（再掲） ・アーカイブ機能は、すでに進んでいるプロジェクトと調整しながら、重複しないように	
③多くの人が訪れる ・ストック（箱）ではなく、フロー（人の流れ）を作り出す施設 ・拠点の対象者をどこにおくか。市外の人だけではなく、市民にも訪れてほしい ・広島の平和祈念公園・資料館などは国内外から人が訪れつつ、市民の参画もある。そのような両立できることを目指したい ・人と防災未来センターの事例を鑑みると、中心部は市外から求心力を持つ一方、地元の人が客体化する危険性をはらむ	**①人が来るための身近な仕掛け** ・人々から縁遠い施設になると願う結果は得られない。あえて下世話感・エンタメ感も必要 ・施設が開かれているためにはお茶飲み、おいしいコーヒーなど食に関することが必要 ・例えば食事できる場所やショップ蚤の市などが周りにあり、子供が遊び大人も同時に楽しめるような場をつくってリピーターを増やす ・入場割引のように、市民が何回も来場しやすい仕組み **②子どもが周りで遊べるモニュメント** ・追悼のシンボルとしてモニュメントが必要であり、周りでは子どもが遊びつつ、モニュメントの由来を通じて震災の記憶を親から子に継承するような二重の機能が必要。（再掲） **③複数の要素を戦略的に分けて考えること** ・象徴的な存在とフローの仕掛け、アーカイブ等の記録を一括りにしてしまわず、戦略的に分けて考えることも必要	**①リピーターが訪れている** ・絶えずリピーターが訪れている **②市民が外から来た人を案内する** ・仙台市民が外国や他県の人を案内したくなる **③日常空間として人が集いつつ、特別な日だけ厳粛な空間に包まれる** ・普段は日常空間として人が集いつつ、特別な日だけ厳粛な空間に作り込むという方法もある

5　その他のキーワード

・震災時の様々なシーンの舞台は「路上」だった